あずかりもの

倉田タカシ

Takashi Kurata

WIRED
SCI-FI
サイファイプロトタイピング研究所

© Condé Nast Japan

土曜日、地区の返却センターの前で、勇夢(いさむ)おじさんとばったり会った。

おじさんも歯ブラシを返しにきたところ。まっ白の髪が両耳の上あたりでちょっと突っ立って、午後の陽をあびている。

こないだママが予想してたとおりの不満顔だったから、おじさんには悪いけど、笑いそうになってしまった。ママは口調まで真似して、「さすがにこれはなぁ、やりすぎだろぉ」って。子どもの頃におじさんに可愛がられてた分だけ、遠慮がない。おじさんはおじいちゃんの弟だから、ふつうは大おじさんと呼ぶんだろうけど、ママの呼び方をわたしも受け継いでしまった。

実際の勇夢おじさんはさすがにママが予想したようなセリフをいわなかったけど、返却口に歯ブラシを放り込みながらわたしを見て、すごく派手に「やれやれだぜ」という顔をしてみせたから、吹き出してしまった。

「マチカちゃん、菱峰(ひしみね)さんの仕事を手伝うんだって？」

そう訊かれて、うわ、もう伝わってんだ、というのと、そりゃママがいうにきまってるか、という感想が頭に浮かんだ。

「わたしはフィジカルじゃないバイトがよかったんだけど」

とこっちもつい不満顔になってしまったから、こんどはおじさんが笑って、

「いきなりメタバで仕事なんて、薫(かおる)が許さないだろ」

「そう！」

薫ことママが許してくれなかった。だめだめ、まだ十七歳でしょ、最初のバイトでそれはだめ、って……ママはメタバースを怖がりすぎなんだよ。

どのみち稼ぎは全部メタバで使うのに、無駄に経済圏をまたがらせないでほしい。￥からメタバ通貨に移送するときに、レート変動を見て損しないように注意しなきゃいけないのがほんとに面倒だし、いままでもそれで小遣いをちょっと損したことあるし。

「菱峰さんなら、最初のバイトにちょうどいいな」

「あ、そうか、勇夢おじさんとは知り合いなんだ！」

聞いたのがだいぶ前だから、忘れてた。昔、勇夢おじさんと同じスーパーマーケットで働いてたらしい。スーパーマーケットというのがどういうビジネスなのか、わたしはいまだによく分かってないけれど。

「菱峰さん、厳しくない？」

「ああ、厳しいよ」

勇夢おじさんはそういってからハハハと笑って、

「厳しいといっても、要求が高いだけで、叱ったりはしないから、心配しなくていいよ」

「要求が高いだけで十分怖いよ！」

© Condé Nast Japan

きのう新しく取り付けられた歯ブラシ返却ポストに、地区の人たちが次々に歯ブラシを入れていく。そのほかのこまごました日用品も一緒に。顔を合わせた知り合いと軽く挨拶したり、その場で話し込んだり。わたしも何人かに挨拶する。

それを見ていた勇夢おじさんが溜息をついて、歯ブラシ返却ポストを指さした。

「やっぱりこれはなあ、さすがにやりすぎだと思うんだよな」

あ、やっぱりいった。

「だいぶ慣れたつもりだったけどな、シェアエコノミーってのがまさかこんなとこまで進むとは思わなかった」

おじさんは十年以上シンガポールに住んでいて、半年前にこの地区に戻ってきた。まだちょっと浦島太郎なのだ。

消毒ずみの歯ブラシが入ったボックスから自分用の硬さのやつを一本とりだしながら、おじさんはまだ不満そうで、

「きょう使う歯ブラシを、きのう誰が使ったかって、気にならないもんなの？」

「わたしは気にならない」

むしろ、なんでそれが気になるの？　とわたしは思う。いちど口に入れたものを家に置きっぱなしにして、どんどん菌が繁殖しちゃうほうが気持ち悪いと思うんだけど。自動でメンテされるから、毛がダメになったものを使わなくていいし。

でも、勇夢おじさんが気にするのはしょうがない。べつの時代を生きてきた人だから。

しょうがないし、歯ブラシの完全共有化は、高齢の人からの反対がいつもより多かったとママもいってた。これもママの発案なんだよね。

ママがこの地区のコモディティ・コーディネーターになってから八年くらいだけれど、カウンシルにもどんどん大きな要望を上げられるようになって、すごい発言力を持つようになっちゃって、わたしはいつまでたっても新鮮に驚いている。え、うちにそんな大物がいるの、って。

「みんな、所有っていう概念をなくしちまったんだよなあ」

おじさんがそういって首を振る。おじさんがここに戻って来てから何度も聞いた言葉だ。

わたしも、いつもながら、おじさんのいうこの〝所有〟という言葉の意味がわからない。

少なくとも、それは正しくないことだという気がする。正しくないから、なくなっちゃったんじゃないのかな。だって、ずっと自分のところに置いておく意味ってほとんどないし、食べ物みたいに消えるものじゃないのに、たくさんの人がずっと手元に置くために同じものをたくさん作るって、そうとう無駄じゃない？昔はそれで大丈夫だったのかもしれないけれど。たとえば、どの家にも自動車が

© Condé Nast Japan

あったなんて話をきくと、びっくりする。乗るのは一日にほんの数分かもしれないのに、それだけのために、あの大きくて複雑な機械を一家に一台、家によっては二台も三台も持つって……。買うのに必要な金額もすごく大きかったらしいし。

「だいたいな、〝コモディティ〟っていったら、もともとの意味はさておき、おれたちの商売では買えるものを指す言葉だったんだよ。つまり、所有できるものだよな。ところが、いまはそれが、共有するためのものって意味になってるだろ？」

「食べ物もママが扱うコモディティに入るよ」

「腹のなかに消えちゃうものは共有できないもんな。そこはおれの常識と一緒だから、すごく助かってるよ」

食料品は、ものによっては何か月もしまっておいたりするけど、なくなっちゃうものだから、おじさんのいう所有とはやっぱり違う。ママが使う言葉でいうと、消耗財なんだよね。

「でさ、〝買う〟っていう言葉がまた、意味が変わっちゃってるだろ？」とおじさんがいう。

「ああ、そうなんだろうね……」

わたしもいろいろ買ってはいる。小遣いが少なくて不満だけど。でも、それはたんにフラグをつけるというだけの意味だ。なにかのデータを、自分のアカウントに関係のあるものとして登録する。アバターのデコレーション、限定ライブのチケット、ゲームのアイテム。自分が使いたいときに、それを使うことができる。データはふつうどこかのストレージにあって、わたしがいま使ってる端末にあるとしても、それはたまたま、一時的なことだから、たぶんおじさんのいう〝所有〟とはちがう。購入イコール所有っていわれてもピンとこない。

携帯端末やＶＲグラスとか、ずっと使い続けるものはおじさんのいう〝所有〟に近いのかなと思うけど、長くても数か月しか同じものを持てないっていうのがもうダメらしい。

服といっしょだと思うんだけど、おじさんにいわせると、服だって本来は買って〝所有〟するものだって。シーズンが変わるたびに返却するなんて変だっていわれる。家に置いといてもジャマなだけなのにね。

どの服をいつ自分が着るか、友だちと相談して調整するのもありえないって。昔はデザイン可変の服が少なかったってことも大きいんだろうなとは思う。色や柄も変えられなくて、べつの色にしたいと思ったら、もうひとつ買うしかなかった……考えてみるとそれはすごい。

でも、まあ、歯ブラシが微妙なラインだってことはわたしもわかる。ママがいうには、メンテナンス技術が進歩したおかげで、カテゴリーが消耗財から耐久財

© Condé Nast Japan

のほうにちょっと上がってきた、だから、理念としては共有品としての扱いにシフトさせなきゃいけないんだって。スジを通さなきゃってことね。

家に戻るおじさんの背中を眺めて、自分も年を取ったら世の中についていけなくなっちゃうんだろうかと、ちょっと心配になった。ついていけなくても幸せに生きていけそうな気もするけれど。

おじさんだって、べつにいま不幸なわけじゃないと思う。でも、もっと楽しく暮らせたらいいのになと思う。わたしが幼稚園児のころ、わたしのおじいちゃん、つまりおじさんの兄とふざけあったり、息ができなくなっちゃうくらいわたしを笑わせたり、そういうのがわたしの大事な思い出になってるから。

翌週の土曜、初めてのバイトの日。

サービスカーが再生紙で出来てるなんて、知らなかった。

毎日目にしてるものでも、知らないことがたくさんある。

「再生紙っていっても強化処理してあって丈夫だし、エアバッグもあるから安全だよ」

菱峰さんはそういって笑った。

「絶対に高速道路を走ったりしないからね、これでいいの」

座席のうしろに小さく畳まれているロボットを叩いて、

「このロボットも、基本パーツはぜんぶ竹なのよ。３Ｄプリントよりも機械加工のほうが安くて早いしね。そういうところでなるべく経費を減らして、わたしたちのお給料に回してるわけね」

最初は緊張したけど、菱峰さんはぜんぜん厳しくなくて、ちょっとゆるいくらいだった。ママより一回り以上年上だけど、ママよりずっと体力がある。

「荷物を車から出すときにいちばん気をつけてね。うちで使ってるロボットはあんまり気が利かないから、人間がちゃんと保持するまえに手を放しちゃったりするの」

サービスカーに載せてあるロボットはひとつだけで、これが車から荷物を取り出すまではやってくれる。でも、それを各戸まで運ぶのは人間の仕事。それほど重い荷物はないけれど、食料品のカートンはけっこう大変。

ラストワンマイル、と菱峰さんは呼んでいる。

「昔とは、ちょっとだけ意味が変わってるの。配達が自動化されるまえは、たんに流通のいちばん末端の経路のことだったけれど、いまは、機械化しない部分という意味が大きいのよ」

仕事は、配達よりも回収のほうが多かった。配達は平日にもやるけれど、回収は土日に集中するんだって。いわれてみればそうだった。

© Condé Nast Japan

回収センターに出すものと、こうして各戸を訪問して回収するものに分かれるのが不思議だったけど、ひとつにはやっぱり大きさの問題があるってこと。きょうは音楽用のキーボードやスピーカーがあって、とくにスピーカーは大変だった。

ママがああいう仕事をしてるから、だいたいの仕組みはわかっているつもりだったけど、実際にやってみたらいろいろ驚くことがある。

回収品を受け取るときに、借りていた人から、菱峰さんがかなり詳しく話を聞いているというのが驚きのひとつ。

「この仕事を人間がやるのは、使用者の話をちゃんと聞く必要があるから。ＡＩに対話をやらせると、ニュアンスを正しく拾えないこともあるでしょ」

菱峰さんくらいの歳だと、ＡＩを無条件に信頼している人が多いような気がしていたので、ちょっと意外に感じた。

「いまはとにかくＡＩのあとをついて回って粗探しをするみたいな仕事ばっかりだけどね、それはそれですごく大事なのよ。ようするに、手放しで使える道具なんてそうそうないってこと」

理屈はわかるけれど、そういうＡＩのあとをついて回るみたいな仕事、たとえば、何十キロも離れたところにある畑のようすを一日中チェックする仕事とか、やっぱりきつそうだなと思う。昔は人が機械を運転したり、自分の体を使って収穫したりしてたんだから、それに比べれば楽なんだろうけど。

でも、観光局に就職しておもてなしキャストをやるのもなあ。政令指定観光都市の雰囲気をわたしはぜんぜん好きになれない。ずっとそらぞらしいお祭りをやってなきゃいけない感じが。友だちは、夢を売るってすごくいいじゃんっていうんだけど、あんまり売るほうにはなりたくないんだよね。買うほうはもちろん好きだけど。

そして、ママは、わたしがシェアリングの仕事で大きい役職についたらいいと思ってる。最後は自分で決めなさいといいつつ、じわじわそっちのほうに押してくる。このバイトを勧めてきたのだってその一環だしなあ……

「流通なしにシェアリング社会は成立しない、しっかり学んできなさい、ってママにいわれました」

なんとなくボヤきのトーンになってしまったかなと、いってからちょっと恥ずかしくなった。

「おおもとが共同購入システムだものね。それが、大不況と産業衰退のおかげで成長して、衰弱し切った政府がただ乗りして、社会の標準になったのね」

そのへんについては、学校で習うよりもママから聞かされて知ったところが大きい。

© Condé Nast Japan

――ようするに、モノはないし、買うお金もなかったわけ。だから、それならなんでもシェアしたらいいじゃないという話になったの。

ママが共同購入システムの会社に入ったのはわたしが二歳のころで、そのころはまだ、共同購入がメインだった。わたしが小学校に入るころには、シェアが中心になっていた。

それから、共同購入システムの国有化がきた。二〇四七年、わたしが九歳のとき。勇夢おじさんはもうシンガポールに行ってしまってた。

コモディティ・コーディネーターの仕事は、選択肢を増やすことなんだよ、とママはよくいう。

地区の人たちから意見を吸い上げて、新しい共有アイテムの提案をカウンシルに上げる。デザインにもかかわるし、試作品のお試し会をやるし、菱峰さんからもユーザーの使用感をきく……

わたしは、じつは選択肢を減らしてもいるよね、と思っている。勇夢おじさんはそのへんにも不満があるんだよね。ただ、わたしは、ママたちが減らしているのは、そもそもそんなに選択肢が多くなくてもいいところだとわかってる。

おじさんは、歯ブラシにしたって、デザインのバリエーションが少なすぎるって文句をいう。わたしは、歯ブラシにそんなにたくさん選択肢をつくられても、正直、困る。昔の人は、細かいものまでいちいち他人と違うものを使いたいという気持ちが強すぎるんじゃないかなといつも思う。

菱峰さんがいった。

「どこまでを共有財とみなすかについては、これからもずっと綱引きが続くんじゃないかな。歯ブラシも、もしかしたらまた消耗品に戻っちゃうかもね。わたしも古い人間だから、矢田部さんの気持ちはけっこうわかるのよ」

矢田部、おじさんの姓だ。

「でも、このシェアリングの仕組みは、小さくなったこの国にはちょうどいいシステムだと思うけどね」

小さくなった国か、とわたしは思う。

これから大きくなる国だよね。大人はみんな、自分たちが通り過ぎてきた下り坂を忘れられないけれど、わたしたちには目の前に延びている上り坂しか見えない。

たぶん先々月のことだったと思うけれど、メタバでモールをぶらついてたら、〝スーパーマーケット〟という文字がふっと視界の隅をよぎった。フォーカスしてみたら、フォトグラメトリー・アーティファクトの展示だった。

© Condé Nast Japan

二〇二八年だから、いまから二十七年まえに記録されたらしい、スーパーマーケットの店内。

入ってみて、単なる３Ｄスキャンだから当然だけど、動くところがどこにもないから、まあそうだよねと思って、さらっと通り過ぎようとしたんだけど、ふと、棚に目が吸い寄せられた。なにか、見たことのないものがそこにある、という感じ。

昔のお店とか、そこに並んでいる〝商品〟というものを、ちゃんと見たのはこれが初めてだったかもしれない。

メタバにあるいろんなアイテムのショップに似ているけれど、いや、そもそも、ああいうショップのモデルになったものなんだろうけど、もっとぐちゃぐちゃで、激しいものを感じた。べつに並べ方が崩れているわけじゃなくて、きれいに揃えてあるのに、この印象はなんなんだろうと思った。ひとつひとつのアイテムが違うデザインスキームで作られていて、それがたくさん、狭いところにぎゅうぎゅうに詰め込まれているからなのかもしれない。

並べられたパッケージは、ひとつひとつがこっちに向かって叫んでるみたいに見えた。

字がすごい。商品名とか、宣伝文句とか。ひとつのパッケージのなかでもぎゅうぎゅうに詰められて、影をつけて立体的にしたり、ごつごつした筆文字にしたり。

買って、買って！　……と叫んでる。客に向かってしつこく呼びかけてる。面白いなあと思うけれど、耳をふさいで逃げ出したいような気持ちにもなる。

メタバのショップで見るような有料アイテムのデザインは、こういうのをすごく薄めて上品にしたものなんだということがよくわかった。

これが〝所有〟の世界ってことなのかなあ……

モノたちの絶叫にかこまれて圧倒されていたら、あなたの知り合いが近くにいます、というマーカーがポップアップして、見たら、なんと勇夢おじさんだった。……無防備！　さすが昔の人。

見つけちゃったからしかたないと思って、コンタクト要求を送ったら、おじさんもそんなのが飛んできたことにびっくりしたみたいで、なんだか照れ臭そうにしたアバターが目の前に出現した。

「マチカちゃん、なんでこんなとこにいるの」

それはわたしもおじさんに聞きたかった。

「この店な、おれの担当地区だったんだよ」

おじさんはそういって、目を細めて店内を見わたした。

© Condé Nast Japan

「このスキャンが撮られた年に、おれは、いくつだったかな……三十三か。いちばん無理が効いたころだな。よく働いたよ」

おじさんはよく働いたんだよ、と記憶のなかのママの声が重なる。

アバターでもよくわかるくらいに、おじさんの横顔がほころんだ。

「こんなふうに商品が並んでるのを見るだけで、わくわくしちゃうんだよな。ぎっしりと並べてやるのがおれの腕なんだ。店の棚を、それから倉庫を、いつでも商品で埋めてやる、どこからでも調達してみせる。商品がちゃんと作られているうちは、それができたんだけどな……」おじさんの笑顔が、すんと消えた。

顔をうつむけて棚の商品を見つめる勇夢おじさんのアバターの向こうから、過去がおしよせてくるような気がした。

それは、つまり、下り坂の思い出。

おじさんにも上り坂が必要なんだ。

サービスカーは、わたしがふだん行かないエリアにやってきた。

わたしが子どものころに〝おうちの根っこ〟と呼んでいたコンクリートの基礎が、このあたりにはまだたくさん残っている。地区の中心から遠い証拠。

わたしが住む地区は、むかし住宅地だったから、海外からのお客に見せられるものがなにもなくて、観光地指定は受けられなかった。でも、この静かな雰囲気がわたしは気に入ってる。派手なのはメタバだけでいい。

低反射の発電布が緑道に色とりどりの淡い影を落として、そのなかをサービスカーはごとごとと進む。おうちの根っこは、だれかが花壇にしているものが多い。

遠目にもちょっと小ぎれいにリノベーションされた家がぽつんとあって、そこに菱峰さんは車を止めた。

原さん、と菱峰さんが声をかけて、家からその原さんが出てきた。長い灰色のひげをはやした、勇夢おじさんと同じくらいの歳にみえる男の人。

原さんはわたしの挨拶に会釈でこたえてくれたあと、

「新しいアルバイトの人ですか。ちょっと時間あったら……」と菱峰さんにいう。

「ああ、そうですね。マチカさん、いいもの見せてもらえるよ」

「え、なんですか……」

よくわからないまま家に入れてもらった。

家のなかは外よりもさらに小ぎれいで、玄関からすぐのところに、しんとした雰囲気の広い部屋があった。

部屋の中央には白くて四角い台があって、透明な四角いカバーがかけてある。

その中に置かれているのは、四角くて、平たい物体。だいたい全体的に黒くて、艶がある。上の面には、きらきら輝く小さいかけらが隙間なく並べられて、複雑

© Condé Nast Japan

な模様になっていた。模様にはいろいろな曲線のパターンが重ねられているみたいで、それがつぎつぎに見えてくる。
「この技法は、螺鈿というんだよ。貝殻を薄くして、細かく切って、ひとつひとつ貼ってるの」原さんが横から教えてくれた。
「らでん……」
　遠くから見ればただの四角い箱なのに、近くに寄れば寄るほど、ふつうのものじゃないとわかった。
　メタバで見る、どこまで拡大しても細部があるオブジェクトみたいな感じ。
　わたしは、ケースのまわりをぐるぐると回って、自分でも意外なほど夢中になって眺めた。
　ただの現実のモノで、べつにディスプレイがついてるわけでもないし、なにも動いていないのに、見ているだけでこっちの心がどんどん動く。どんどん持っていかれる。ちょっと視線を動かすと、色も輝きかたも変わって、べつの風景が現れるみたい。
　全体の形をたんなる四角と思ったのも勘違いで、とても微妙な曲面が組み合わさって、四角いような印象を持たせている。どうやったら作れるのかわからない、謎のかたまりと表現したくなるようなものだった。
　こういうのを見ると、やっぱり物質とか物体ってすごいな、と思わずにいられない。人間の手でこれを作るって……
「これは、二〇三四年の日本伝統工芸展で賞をとったんだよ」
　原さんが、まるで自分が賞をとったみたいにいうから可笑しかったけど、でも、そりゃ賞をとるでしょうと思う。
「これを人間が手で作ったって、すごいですね……」
「もうこの時代になると、昔のように単純に人の手だけで作ったとはいえないけどね。これも、たしかデザイン自体はＰＣで、ＡＩ援用でやったんじゃなかったかな。そんなインタビューを読んだ記憶がある。貝を貼るときにも、ＡＲをガイドにしてると思う」
「三四年って、もうそういう時代だったんですね」と菱峰さんがちょっと感心したみたいにいった。
「すごく綺麗ですけど……なんでこれを見せてくれたんですか？」
　わたしがきくと、原さんは笑って、
「いや、こうしてね、なるべく多くの人に見せなきゃいけないの。そういう名目で貸り出してるからね」
　菱峰さんが説明してくれる。
「原さんは、骨董店を経営してた人なの」

© Condé Nast Japan

「もちろん、廃業したけどね」と原さん。

ああ、とわたしは言葉に困ったけれど、原さんはほがらかで、

「いまは観光局で文化考証をやりつつ、美術工芸品の貸し出し業務も兼任してて、自分で自分に貸し出したりもしちゃう。業界の人間でも、借りるのはそんなに簡単じゃないんだけどね。きびしい審査があるし、待ち時間も長いし、移送には特別な配慮が必要だから、費用もけっこうかかる。カメラで二十四時間監視しなきゃいけないしね。でも、それだけのことはあるね」

あらためて作品を見下ろして、原さんのいうとおりだと思う。

「僕はね、だから、いまの世の中の流れが気に入ってるんだよね。独り占めできなくなったかわりに、昔だったら博物館でたまに見ることくらいしかできなかった傑作を、すこしの時間であれば自分の手元に置いて、何時間でも眺めていられるんだから。商売はできなくなったけど、いい時代になったと思ってるよ」

そういって笑ってるから、なんか、生きるのが上手な人なんだなあと思った。

勇夢おじさんもこのくらいうまくやれないのかな。やれそうなんだけどなあ。

原さんは展示ケースをのぞき込んで、

「昔ね、まだ商売をやってたころ、よくいってたんだ。骨董っていうのは、あずかりものなんだって」

「あずかりもの？」

「こういうすばらしい芸術品は、どれも人類全体の宝なんだよ。何百年でも何千年でも、大切にしつづけて、未来の世代に受け継いでいかないといけない。だから、高いお金を出して買うけれども、それは、自分がしばらくあずかっているだけなんだって考えるんだ。しばらくってのは、ようするに、自分の寿命のあいだってことだね。まあ、そういいながら自分の家にしまい込んじゃうんだから、いい気なもんだけどね」

原さんはニヤニヤとした。

「骨董の世界の人間は、所有よりも体験が重要だということを、昔から心の隅でわかってたのかもしれないね」

わたしにとっても、〝体験〟がいちばん大事。たぶん、いまの若い人はみんなそうだと思う。

勇夢おじさんのいう〝所有〟がいまいちピンとこないのは、そういうことなんだな。体験していないあいだは、そのモノは自分にとってなんの意味もないんだもん。自動車も、ホットサンドメーカーも、キャンプのテントも。

でも、考えているうちに、ちょっとおじさんの感じ方もわかったような気がしてきた。それは、安心感と関係があるのかもしれない。手元にあるからいつでも

© Condé Nast Japan

体験できるんだ、という安心感。いまはそんな心配しなくてもいいと思うんだけど。
　だから、うん、〝所有〟だって一種の体験なんだ。かなりわかったような気がする。おじさんと共有したいな。

　またサービスカーに戻り、つぎの回収ポイントへ移動する途中、菱峰さんがいった。
「骨董の世界は、商社の世界よりも大変だったと思うよ。商品として持っていたものも、自分のために持ってたとっておきのものも、ほとんどただ同然で国や自治体に差し出さなきゃいけなくなったんだから。もう、阿鼻叫喚って感じよ」
　うえー……
「なんでそれを受け入れられたんですか？」
「業界団体が国と交渉して、骨董や美術品を個人が借りだせる例の制度を作らせたの」
「そうなんだ……」したたかだなあ。
　サービスカーはけっこう揺れた。アクティブサスなんてものはないみたい。キャンプにいくときに使うような自動車よりもずっと質素なつくりだということに驚かされる。
　この辺り、特に道がひどいんだよね、と菱峰さんがいって、
「道路インフラの完全回復には、まだまだかかるでしょうね。アスファルトの低コストな代用物をなかなか見つけられないし」
　とくに、この地区は非観光都市だから、いろいろ後回しにされてる気がする。静かなのはいいんだけど。
　フロントウィンドウにマスキングテープで留めてあるディスプレイシートは、端がちょっと劣化して見づらくなっていた。でも、まだ使えるのはわかる。そこに表示させた町内マップに、回収ポイントとルートが重ねてある。通ったところはアイコンが変わる。
　菱峰さんがディスプレイをタップして記録画面を出し、コメントを書き込んでいく。
「小売・流通って、むかしは企業が利益のためにやってたの。いまは小売がほぼなくなって、流通業はこんなふうに社会のインフラになった。わたしもその激変を経験した人間だけど、結果としては、いまのほうがわたしの性格には合ってるみたい。激変のまえも、たとえばコンビニ……もうそういうものはないけどね、そういう、営利企業による商業施設ではあるけれど、事実上、社会の不可欠なインフラとして機能していたサービスがあったのね。わたしは、世の中のためにな

© Condé Nast Japan

ることだから小売流通の仕事をやっているというところがあったから、国有化とインフラ化は個人的には歓迎だったのよ」
「わたしの母もそうなんですかね……」
　ふふふ、と菱峰さんは笑って、
「あなたのお母さんにも、そういう意識はあるかもね。でも、多分だけど、わたしよりもずっと矢田部さんに近い人なんじゃないかな。自分の能力を証明するためにやっているというか、達成感のために仕事をしている人だと思う。それから、激変の始まりのころに社会人になったでしょ。へんに昔をひきずってない強みがあるんだろうね」
　勇夢おじさんは、どうしても昔をひきずっちゃうからなあ……
　わたしは、菱峰さんにいった。
「勇夢おじさんは、マネージャーをやったらいいと思ったんですよ」
「マネージャー？」
「エンタメの」
「ああ、メタバのね」
　菱峰さんはいま上手に隠して返事してくれたような気がするけれど、メタバはとにかく大人にウケが悪い。
　せっかく観光客が落としてくれる外貨が、わたしたち若者を通してメタバースに流出する、ぜんぶ出てっちゃうどころか、入るより出ていくほうが多い、ということがずっといわれてて、ほんとにひどいと思う。メタバで金を使ってるのは若者だけじゃないし、わたしくらいの歳が出生率の谷底なんだから、ママくらいの年代のほうが購買力があるはず。
　エンタメは、この十年くらいで中国からベトナムに中心が移ってきたけど、最近は日本のプロダクションもがんばってて、わたしも応援してるグループやソロアーティストがいる。
　で、いま問題になってるのは、日本からどんどん新しくデビューしてて、プロダクションも立ち上がってて、マネージャー人材が足りないってこと。
「マネージャー業って、人間がやらないとだめなんですよ。実務はＡＩが当然やるけど、人間が売り物だから、売り手にも人間力がなきゃいけない。そこをＡＩに頼ってるプロダクションはやっぱり弱いです」
「へえー、そうなんだ……それは希望のもてる話だわ。ＡＩにどんどん仕事を持っていかれた世代としてはね」
　勇夢おじさんはすごいやり手だったってママもいってるし、いまも交渉力あると思うんだよね。急にここに戻ってきたのに、わりとすぐに近所の人たちとお友

© Condé Nast Japan

だちになってたし、家の割り当ても、地区の住宅担当をうまく説得して最初よりもちょっといいところに移ってて、ママもびっくりしてた。
「だから、勇夢おじさん用に、ビジネスアカウントのＡＩポートレートを組んだんです。マネージャー業にチューンして、あとはちょっとおじさんが自分で対話してキャラクタライズすれば、ビズスフィアに上げられるやつ」
「おじさんがメタバで求職するためのツールってことね。ＡＩはイチから組んだの？　いまどきだと、やっぱり完全にノーコードなのかな」
「学校でみんな使ってるフレームワークがあって、それでささっと作っただけなんですけど、コードっていうかロジックは自分で組まないといけないところがちょっとあって……」
　業界の非明示的なしきたりにフィットさせるのが一番めんどくさかった。調べなきゃいけないことの深さが予想以上で。
　そうかそうか、と菱峰さんは笑顔になって、
「矢田部さん、きっと喜ぶと思うよ」
「だといいんですけど。ほんとに向いてると思うんですよね」
「そうねえ、矢田部さんは、ある種の交渉力をすごく発揮できる人だったな。あなたのお母さんとはまた違う意味でなんだけど。お母さんは、周到に情報を集めて、根回ししていくタイプでしょ。矢田部さんはね、細かいことは無視してグイグイ押すタイプ」
　そういって笑い、
「けっこう強引にやるんだけど、それなのにあんまりいやな感じにならないのね。そこが人徳っていうか、人間力というか」
「わかる！」
　菱峰さんは楽しげにわたしを見て、
「マチカさんはやっぱりお母さんにちょっと似てるところがあるよね」
「えー、似てないです！」
　あんなにえげつなくない、というか、自分があんなにやり手になれるとは思えない。

　車はおじさんの家についた。
　出てきたおじさんの顔を見て、びっくりした。
　明るい！
　よく見ればそれほど変わっていないんだけど、一週間まえとは明るさがぜんぜん違う。このぴかぴかの晴天を見て、いままではどんより曇り空だったんだってはじめて気づいた。そう、昔のおじさんはこうだったよ！

© Condé Nast Japan

「おれな、薫の仕事を手伝うことにしたんだよ。委託スタッフとして」
「えーっ、そうなんだ！」
　先を越された！
「まえにオファーを受けたときは断ったんだが、気が変わってな」
　それも知らなかった……
「なにで気が変わったの？」
「山本町の物流センターにな、薫が連れて行ってくれたんだよ。行ったことあるかな」
「ああ、あそこね」
　白い、四角い、すごく大きいのに窓がないのがちょっと異様な感じのする建物。昔は、おじさんがいた会社の施設だったらしい。
「おれが最後に見たとき、十五年くらい前だけどな、あそこはほとんど空っぽだったんだよ。流通させるものがなくなっちゃってな。もう、そのあとは取り壊したか、廃墟になってるだろうと思ってた。だから、まだちゃんときれいなままだったのに驚いたし、中に入って、さらにびっくりした」
　わたしも一度だけママに連れていってもらったことがある。中一のころだったかな。外側からしてもう大きくてびっくりするんだけれど、中身がまた……
「いまは、ぎっしり詰まってるんだよな。天井まで、いろんなモノが積み上げられてて。おれの時代には、あそこに置かれていたのは、ドラッグストアのチェーン店で売る品物だけだったけど、自動車や船まである。人間の暮らしに必要なものがぜんぶ置いてある」
　この倉庫に、この町の生活が可視化されてるんだよ――そうママがいったのを覚えてる。
「もうひとつ印象的だったのが、すごく動いてるんだよな。昔だって、フォークリフトやカートが行ったり来たりしてたけど、あれとはぜんぜん速さが違うんだ。こう、ラックの間にびっしりレールがついてて、そこをロボットがびゅんびゅん走ってな……」
「そうそう。すごいよね」
　わたしもそれがすごく印象に残っていた。巨大な本棚みたいなラックがずらっと並んでいて、その側面に縦横に細かくレールが取り付けてあって、荷運びのロボットがたくさん動き回ってる。うおんうおん、と倉庫のなかにロボットの動作音が響いてて、話をするのにちょっと困るくらいだった。
「でな、薫がいうんだよ。これがいまの〝豊かさ〟なんだって。だれもが、そんなにたくさんの金を出さなくても、ここにあるものをなんでも使える、それが昔

© Condé Nast Japan

にはなかったことなんだって。で、この選択肢を増やしていくのが薫の仕事なんだってな。ああ、そうなのか、とすごく感心してなあ……」

おじさんの目がきらきらしている。

わたしの横で、菱峰さんがニコニコとうなずく。

「あれを見たらな、いろいろ昔と違うところはあるけれど、やっぱりここにおれの仕事はあるなって思ったんだよ」

おじさんは、ちょっと照れ臭そうな顔になって、菱峰さんのほうを見た。

「結局、俺がなかなか諦められなかったのは店だったんだね。それがようやくわかったというか、諦めがついたというかさ」

「そうですね、昔のいいかたでいえば、店舗が矢田部さんの〝戦場〟でしたものね」

そういう菱峰さんに、おじさんはうなずいて、

「でも、店がなくても同じだね。大事なところは変わらないんだ」

おじさんはまたわたしに向かって、

「昔は商品がたくさんあることが大事だった。それを必要とする人がたくさんいるときに、数を用意するしかなかったからだな。おれは、数を用意するのが得意だった。でも、いまは商品というものがなくなって、必要とする人に届けるべつのやりかたがある。おれもそれをできそうな気がしてきたんだよ」

「おじさん、すごく元気になったよ」

「そうだろ、自分でもみなぎってる気がするよ」

おじさんの話しっぷりを聞いてるだけで、あ、大丈夫なんだな、と思えた。

じゃあ、わたしのプランはしまっといてもいいや。必要になったらもちろんすぐ出すけれど。

「あ、そうだ、これもお届け物」

そういってわたしが透明な書類ケースを渡すと、おじさんはすぐに顔をほころばせて、蓋を開いて大きい画用紙の束をとりだした。

一枚目の紙には、いさむおじさんへ、と大きなクレヨンの字がおどっている。それから、おじさんの似顔絵。

勇夢おじさんは、先月、幼稚園で開かれた春分の日のパーティにボランティアとして参加して、もてなし役をやっていた。ママとわたしの二世代を魅了した人間力で、たちまち子どもたちの人気者になって、この似顔絵がおじさんの手元にやってきたというわけ。

「みんな上手だなあ……」

© Condé Nast Japan

おじさんは、画用紙をめくって、ひとつひとつの似顔絵のむこうに子どもたちの顔が見えてるみたいに笑いかけた。

それから、顔をあげると、ちょっと皮肉な笑いになって、

「この絵も、おれがもらえるんじゃなくて、一時的に手元に置いておけるだけなんだろ？」

わたしは声をはりあげて、

「そう、そうなんだけど、いま勇夢おじさんの手元に来てることが大事なんだよ」

おじさんは眉をあげて、ニッと大きく笑った。

「うん、そうだな。届けてくれてありがとな、マチカちゃん」

（おわり）

© Condé Nast Japan